

# 幻の「小屋野京」

樋口健太郎

## はじめに

なかなか信じてもらえないかもしれないが、実は現在の  
の尼崎市域に遷都する計画が持ち上がったことがある。  
時代は平安時代末期。平清盛は現在の神戸市兵庫区に福  
原という都市を整備し、治承四年（一一八〇）、そこに外  
孫の安德天皇やその父である高倉上皇、祖父である後白  
河法皇を京都から遷した。この事件は一般に「福原遷  
都」とか「福原京遷都」とかよばれているので、安德の  
福原遷幸とともに、京都から福原に都が移されたのだと  
思われている方も多いかもしれない。

しかしながら、実はこのとき安德は福原の平頼盛（清  
盛の弟）邸に入った（のち清盛邸に遷る）というだけで、  
福原を都にするというのは、明確に決まっていたわけ  
はなかった。平城京や平安京などを連想すればわかるよ  
うに、古代の都には、天皇が住む内裏や官庁が建ち並ぶ  
大内裏、碁盤の目状に整備された大路・小路からなる街  
路などが必要で、遷都とはこれらを新たに造営して、天  
皇がそこに移住することにほかならなかった。

ところが、いわゆる「福原遷都」では、安德の遷幸以  
前に都の造営は行われておらず、安德が福原に遷幸した  
後になって、はじめて土地の調査が行われるような状況  
だったのである。そして、都の造営が行われる候補地と  
なったのも、福原やその周辺だけではなかった。実はそ  
の有力な候補地として登場したのが尼崎市域だったので  
ある。その都の名は「小屋野京」という。小稿では、こ  
の「小屋野京」に関する最近の学説を紹介するとともに  
に、「小屋野京」構想がなぜ生まれ、そして頓挫したの  
か考えてみたい。

## 一、「小屋野京」遷都計画とその頓挫

まず、ここでは「小屋野京」遷都計画が持ち上がり、頓挫するまでの過程を見ておきたい。安徳天皇・高倉上皇・後白河法皇が京都から福原に遷幸したのは、治承四年（一一八〇）六月二日のことである。だが、先に述べたように、この段階では、福原に都が造営されていたのでなければ、どこを平安京にかわる新たな都にするのか、決まっていたわけでもなかった。とりあえず、天皇は頼盛邸を仮の内裏として使用し、上皇は清盛邸に、法皇は教盛（清盛の弟）邸に入った。実は、その他、天皇に付き従ってきた人々の多くは、宿所もなく、道路に座り込むような状態であったという（『玉葉』治承四年六月二日条）。

こうした中で、六月九日になって、「輪田」を「遷都の地」とすることが決定され、大納言徳大寺実定以下の公卿と実務官人が派遣された（『百練抄』）。輪田とは福原の南、和田岬のある海岸部で、古代には大輪田泊という港があったことで知られている。ところが、輪田に派遣

された公卿・官人らが土地の調査を行ったところ、様々な問題が噴出した。海と山に挟まれた輪田では、平安京と同規模の用地を取ることができなかったのである。

そこで代わりに出されたのが、小屋野への遷都論、つまり「小屋野京」構想である。「輪田京」は狭くて「難儀万端」だが、小屋野は大変「便宜」があるので、「輪田京」計画は中止し、小屋野をもってそれに代える。ついでには、木工寮の官人を小屋野に派遣して早速用地を確定させよ、ということになったのである（『玉葉』六月一五日条）。

ところが、その後、嚴島内侍と呼ばれた巫女に「小屋野を改めるべし」との託宣があり、あっさり「小屋野京」構想は白紙に戻される（『玉葉』六月一七日条）。代わりに「播磨印南野」（稲美野＝現在の明石市）加古川市周辺）が新たな都城造営の候補地として登場したのだが、ここも水がない、との理由から造営計画は頓挫する（『百練抄』六月一五日条）。新都造営は混迷をきわめ、結局正式な新都造営がなされないまま、内乱の激化により、一月二六日、天皇は京都に戻ることになるのである。

## 二、「小屋野京」はどこか？

では、「小屋野京」はどこに造営される予定だったのか。まず小屋野とは、現在の伊丹市<sup>こじや</sup>昆陽<sup>ひんやう</sup>周辺で、小屋野に遷都するというのであるから、ここに大内裏（王宮）が置かれる計画であったのは間違いない。その上で、山田邦和氏は、さらに突っ込んで平安京と同規模の京城があつたと想定して、「小屋野京」の範囲を復元している<sup>(1)</sup>。それによれば、「小屋野京」は西を武庫川、東を猪名川に挟まれたエリアで、最も北側の一条大路が昆陽池の南にあつたとすると、最も南側の九条大路は当時の海岸線から北へ約二キロの地点になるといふ。これだと、大内裏は現在の伊丹市域に当たるが、京城はそこからJR東海道線くらいまでの範囲となり、すなわちその大部分が尼崎市域に含まれることになるのである。

輪田と比較して、小屋野が大変「便宜」のある土地と評価されていたことは、先にも見たが、このように京城を復元してみると、その利便性は改めて浮き彫りにな

る。昆陽池の南には山陽道が通っており、また山陽道の裏道として播磨まで伸びる有馬道も京城内で山陽道と交差する。さらに神崎川河口部の河尻は当時、淀川水系から瀬戸内海に出入りするためのターミナルであり、山田氏によれば「小屋野京を中心として、平安京、福原、大輪田泊、有馬、難波、渡辺などが緊密な水陸交通のルートによって結ばれるのである」<sup>(2)</sup>。この当時、河尻は京都への物資輸送のための基地として発展していたが、「小屋野京」遷都が実行されれば、首都の外港、全国からの物資の集積地として、改めて「小屋野京」と一体的になって発展したに違いあるまい。

## 三、「小屋野京」構想はなぜ頓挫したのか

「小屋野京」は大変利便性がある場所であり、山田氏は「十分に実現の可能性を持っていた」とされている<sup>(3)</sup>。それでは、なぜ構想は実現せずに終わったのか。そこで改めて注目したいのが、「小屋野京」構想が提起されるまでの過程である。先に「輪田京」は狭くて用地を確保

できないという問題があったと述べたが、だからといって「輪田京」は実現性がなかったわけではなかった。実は公卿たちの間では、「宮城」の規模を縮小すればよいではないか、ということでも妥協が図られていたのである（『百練抄』六月一日条）。六月二五日、内裏（清盛邸）に参上した九条兼実も、藏人頭吉田経房に対して、「宮城」の規模を縮小する妥協案で一向に問題ないと回答している（『玉葉』六月二五日条）。

ところが、風向きが変わったのは、それからすぐのことだった。兼実が内裏を出て、高倉上皇の御所に行ったところ、上皇は兼実に「輪田京」を改め、小屋野を都にする、と述べたのである。兼実には、このあと清盛からも遷都の場所が小屋野に改定されたとの報告があった（同前）。このことから山田氏は「清盛が新京の建設地として和田を第一候補としながらも、ひそかに第二候補として小屋野を考えていた」とされている。<sup>(4)</sup>だが、兼実は清盛邸である内裏にいながら、「小屋野京」構想については全く聞かされていなかったのであり、とても上皇が清盛―天皇サイドと協議して決めたものとは考えにく

い。そもそも高橋昌明氏によれば、清盛は平氏に擁される新たな王朝の新都として、以前から福原近辺への遷都を考えていたとされる。<sup>(5)</sup>だとすれば、かれがこんなに簡単に「輪田京」遷都をあきらめるだろうか。

そこで、筆者は「小屋野京」構想の提案はあくまで上皇の独断で、政権内部でもかなり唐突なものだったと考えたい。そして、この構想が実現しなかった理由も原因はここにあつた<sup>(6)</sup>と考える。名目上とは言え、上皇が政権のトップであつただけに、清盛もいったんは上皇の提案を追認せざるを得なかったが、福原にこだわる清盛にとって「小屋野京」はありえなかつたはずで、すぐに潰しにかかつた。それが嚴島内侍の託宣であろう。上皇の意志をあからさまには否定できないから、神の託宣を持ち出したのである。「印南野京」もはじめから遷都するつもりはなかつたのではないか。「印南野京」構想の白紙化以降、遷都の議論は沈静化し、結局、福原の清盛邸を仮の皇居として、福原周辺を整備することで落着いている。これこそが清盛の真の狙いだったのでないかと考えるのである。

松島周一氏は、福原遷都の時期、高倉上皇を中心とするグループが清盛から「自立して一方のイニシアチブをとった」としている。<sup>(6)</sup>山田氏はこのあと、上皇が「福原副都案」を出したことについて、「上皇の決定を、清盛でさえ正面切つて覆すことができなかった」と述べているが、だとすれば「小屋野京」の場合でも同様なのではないだろうか。この時期の政権は、清盛とは別に高倉上皇という主導権者があり、必ずしも一枚岩ではなかった。「輪田京」「小屋野京」「印南野京」という度重なる遷都候補地の交代は、こうして政権の意志がまとまらなかったことの反映だったと考えられるのである。

〔注〕

(1) 山田邦和「福原遷都の混迷と挫折」(『日本中世の首都と王権都市—京都・嵯峨・福原—』(文理閣、二〇一二年、初出は古代学協会『古代文化』第五七巻第九号、二〇〇五年九月)。

(2) 注(1) 前掲書二〇二頁。

(3) 同前。

(4) 同前。

(5) 高橋昌明『平清盛 福原の夢』講談社選書メチエ、講談社、

二〇〇七年)。

(6) 松島周一「高倉院政と平時忠」(『愛知教育大学研究報告』第五二号(人文・社会科学編)、二〇〇三年三月)。

(7) 注(1) 前掲書二二二頁。

## 応仁の乱における尼崎の戦いと大内氏

天野 忠 幸

### はじめに

応仁の乱は、室町幕府を支える畿内近国から西国の守護の多くが上洛して戦った戦争であった。長期化しただけでなく、原因となった守護家の家督争いなどがうやむやな決着となった結果、幕府が各地の守護を統制できなくなり、守護自身も在国の守護代と内紛を引き起こし、